

『迎えに行けなくてごめんね。大丈夫？』

電車に揺られながら、スマホに届いたそんなメッセージを見て少し笑ってしまふ。

メッセージの相手は四つ年上の洗（こう）お兄ちゃんだ。お兄ちゃんといっても、わたしのお母さんと、洗お兄ちゃんのお父さんが再婚して兄妹になったから、血は繋がっていない。けれどお兄ちゃんはいつもこんなふうになつたことを気にかけてくれているし、優しいし、そしてすごくカッコいいから、わたしはそんなお兄ちゃんが大好きだった。

『家から行くだけだもん、大丈夫だよ。もうすぐ着くね』

そうメッセージを返して、次の乗車駅を見る。

今からそんな大好きなお兄ちゃんといっしょに、ごはんを食べに行くのだ。お兄ちゃんが社会人になって実家を出てしまってから、今日みたいに時々こうして二人でごはんを食べるようになっていた。わたしはお兄ちゃんに会えるだけでも嬉しいから家でもいいのに、と言ったことがあるけれど、お兄ちゃんが

「でもちよつとデートみたいでしょ？」と言つてくれた言葉が嬉しくて、こういう習慣が続けている。

次の乗車駅名を見てもう少しで着くなと思つた瞬間、ふと、電車内の手すり  
に掴まっていた右手に違和感を感じた。見てみると、わたしが掴まっている手  
すりと同じ手すりに掴まっていた誰かの手が、わたしの手の辺りまで降りてき  
ていて、少しぶつかっていたのだ。わたしの手が下にあつて、誰かの手が上に  
いて、まるで串に刺さつた団子のような状態だ。気にしなくてもいいかもしれ  
ないけれど、なんとなく少し嫌だなと思い、手を離そうとした瞬間のことだっ  
た。

その誰かの手が、手すりに掴まるわたしの手を、上から覆い被さるように  
握つたのだ。

(え? え?)

突然の出来事に、頭の整理が追いつかない。間違えて握ってしまったのだろ  
うか? 手を握られる直前、少し電車が揺れたから、その拍子に手が動いてし  
まっただけ?

いろいろなことが頭を駆け巡りながら、ちらりと、気づかれない程度にその手の持ち主へと視線を持ち上げる。わたしの隣に立つ、涼しい顔をしているスーツ姿の男性が見えた。普通のサラリーマンのように見える。

それにますます頭が混乱していると、その手は感触を確かめるかのように、指でつつ……とわたしの肌を撫でた。瞬間、ぞわりと肌が粟立つ。

（これ、絶対わざとだ……！）

すりすりと撫でられたり、やわやわと握られたり、嫌な感じがするのに手を振り解けない。幸いもう少しで降りる駅に着くので、はやくこの時間が終わりますように……と祈りながら目を瞑ると、その男はわたしの指の間に自分の指を割り込ませた。まるで恋人繋ぎをしているカップルだ。

それにさらに不快感が募っていく。汗ばんだ知らない男の手も熱い男の体温も、別に感じたくないのに。

「あれ、奈津（なつ）ちゃん？」

そんな嫌悪感に眉を寄せて目を瞑っていると、突然後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。名前を呼ばれたことに顔を上げて振り返ると、そこにはすらっ

とした長身に整った顔——お兄ちゃんの友達の遙介（ようすけ）さんの顔が見える。

「よ、遙介さん……」

ぼんやりとわたしが遙介さんの名前を呼ぶと、それまでずっとわたしの手を握っていた男の手が、慌てたように離れていった。それに内心ほっと息を吐くと、遙介さんが明るく笑う。

「なんかかわいい子がいるな——って気になってたら、やっぱり奈津ちゃんだ。今からどっか行くところ？」

「あ、えっと……お兄ちゃんとごはん食べに行くところ、です」

遙介さんがわたしと男の間に入って立ったことに、少し安心しながらそう答える。男はわたしが遙介さんと話しているからだろうか、遙介さんが男に鋭い視線を送ったからだろうか、遙介さんが割って入ったあとに逃げるように別の車両へと去っていった。

「洗と？　なら俺もいっしょに行っちゃおうかな」

「え？」

「俺もいっしょなら、奈津ちゃんのこと守ってあげられるし」

ね、と笑顔で続けた遙介さんの言葉に、先ほどのことを見られていたんだと気がついて、少し申し訳なかったけれど素直に頷いた。手を握られた不快感はまだ残っていて、またひとりでいるのはなんだか少し怖かったからだ。



「……で、なんで遙介までついてくるんだよ」

BGMのかかった店内で、お兄ちゃんが怪訝そうな顔で遙介さんを見た。

結局あのあとお店までついてきてくれた遙介さんは、今わたしの隣の席に腰掛けてビールグラスを持っている。

「だから言ったじゃん。洗が奈津ちゃんのことひとりにするから、代わりに俺が——」

「だからそれは聞いたって！ お礼も言っただろ。俺が聞いているのは、なんで店にまでいっしょに入ってきて来てるのかってこと」

そう言うお兄ちゃんは、その精悍で整った顔を少し歪めた。わたしの隣に座る遙介さんがそれに対してへらりと頬を緩めて、少し垂れた目尻が細くなる。短すぎない黒髪にキリッとした顔つきのお兄ちゃんと、やわらかそうな栗色の髪に少し垂れた目が印象的な遙介さんは、それぞれタイプの違うかっこいい顔をしていた。一人でいても目立つけれど二人でいるとより人目を引いていて、先ほどお店に入ったときも店員のお姉さんが赤い顔でぼうつと二人を見ていたのを思い出す。

「えー、洗ちゃん冷たい。俺ひとりあの場で帰そうとしてたってこと？」

「当たり前だろ。奈津とのデートなんだから」

お兄ちゃんがじろつとした目で遙介さんを見るので、わたしは慌てて二人の話を割って入った。

「で、でもお兄ちゃん、わたしずっとごう助かったんだ。だから……」

そう言う、遙介さんがわたしを見て感動したように目を細める。

「そんなこと言ってくれるの奈津ちゃんだけだよ。ホント奈津ちゃんいい子」

小さな子にいい子いい子するかのようにわたしの頭を撫でた遙介さんに、少し恥ずかしくなって顔を逸らしてしまう。そんなわたしを見て「奈津がそう言うならいいけど……」とお兄ちゃんが呟いた声を聞いていると、ふと、カシスオレンジのグラスを持つわたしの手にあたたかい感触が触れた。

「なのに、こーんなかわいくていい子な奈津ちゃんの手握るとか、すげえムカつく。ちゃんと俺で消毒しよーね」

遙介さんはそう言いながら、わたしの手の上に自分の手を重ねた。大きな遙介さんの手にすっぽりと包まれて、なんだか少し恥ずかしい。お酒に酔っているのか、遙介さんの手はやけに熱く感じられて、鼓動が早くなってしまう。

「遙介じゃ消毒にならないだろ」

「洗ちゃんひどいなー」

お兄ちゃんの言葉にもカラカラ笑い返しながらも遙介さんは手を退けてくれなくて、その手はわたしの手の感触を確かめるみたいにすりすり肌を撫でる。指の一本一本を丁寧の手に取られながら撫でられると、なんだかぞくぞくしてしまつて居心地が悪いのに、不思議と嫌じゃなかった。

（さっき知らない男の人に触れたときはすっごい気持ち悪かったのに……）

そう思って、ちらりと隣の席に座る遙介さんを見上げる。お兄ちゃんよりもいくらか明るい髪の間から小さなピアスが見えて、少し垂れ目のきれいな顔にはそれがよく似合っていた。

「ん？ どうしたの、奈津ちゃん。そんな真っ赤なかわいい顔してこっち見て」

こっそり見ていたはずなのに、いつのまにか見ているのがバレてしまつて遙介さんの目がこちらを見る。それに慌てて顔を俯けると、ムツとした口調のお兄ちゃんが「おまえ触りすぎなんだよ」とわたしの手から遙介さんの手を離れた。

「ごめんごめん。でも奈津ちゃんは嫌がつてないもんね？」

遙介さんがそう言つてわたしの方を見る。それにドキドキして目を逸らしながら「い、嫌ではない……です……」と小さく答えると、遙介さんがお兄ちゃんに向かって「ほら」と嬉しそうに言っているのが聞こえた。



そして言いながら、遙介さんはごくごく自然な手つきで、テーブルの下にあるわたしの膝の上に手を置いた。自然すぎて、一瞬置かれたことに気がつかなかったくらいだった。デニムパンツの上から、遙介さんの手の体温が伝わってくる。

（え？ な、なんで……）

「奈津、嫌だったらちゃんと嫌だって言っていいいからな」

驚いていると、お兄ちゃんが心配そうにそう言ってくれる。お兄ちゃんはお兄ちゃんの向かい側に座っているから、わたしの膝の上に遙介さんの手があることは見えていないようだった。

「う、うん……」

別に嫌なわけではないし、膝の上に手があるだけだし……と思って、結局わたしはお兄ちゃんの言葉に頷くだけだった。

「にしてもそういう痴漢もあるんだな……。奈津、大丈夫？ ほかにになにか変なこととかされてない？」

「え……っ」

お兄ちゃんに聞かれて、思わず狼狽えてしまう。遙介さんは変わらずわたしの隣でにこにこしていて、なにを考えているのかはわからない。

狼狽えたわたしを見て心配になったのか、お兄ちゃんが「なにかあるの？」ともう一度尋ねた。

「あ、いや、えっと……………最近、ちょっと、そういうの増えてる…………かも…………」

思い出すように小さな声でそう言えば、お兄ちゃんの顔が少し険しくなった。

「そういうの？」

「電車乗っていると、たまに…………体触られたり…………」

少しだけ視線を落としてしまいがち、お兄ちゃんの言葉に答える。

最近電車に乗っていると、そういうことが増えてきたのだ。スカートの上からおしりを触られたり、肘で胸を突かれたり…………ひどいときにはスカートの中に手が入ってくることもあった。それもあって、最近はパンツスタイルばかりになってしまったのだ。

そして、今まであまり痴漢に遭うことが多くはなかったのにここ最近増えてきた事实に、わたしは少しだけ、心当たりがある。

「最近……太ってきたからかも……」

恥ずかしくて顔を俯けながら小さな声でそう言うと、さっきまで怒った様子だったお兄ちゃんと遥介さんが揃って押し黙った。

「……え？ 奈津が？ そんなふうには見えないけどな」

「うんうん」

「で、でも、最近やっとお酒飲めるようになったから、たぶんそれで体重増えて……」

二人の視線がわたしのグラスの中のカシスオレンジに向かう。

恥ずかしくて、穴があったら入りたいとはこのことだった。体重が増えていることには気づいていたけれど、お兄ちゃんといっしょにお酒を飲めることが嬉しくて、ついつい飲んでしまうのだ。まだ甘いお酒しか飲めないけれど……。

「き、気のせいじゃない？ 奈津ちゃん最近またスタイル良くなったから、

どっちかというとおっぱ……」

「遙介！」

遙介さんがなにかを言いかけたけれど、お兄ちゃんがそれを止めるように遙介さんの名前を呼んだ。不思議に思っ二人を交互に見たけれど、二人ともにここにこするだけで続きを言うつもりはなさそうだった。

「と、とにかく、わたし、ダイエットする！」

そう決意してグッと両拳を握ると、お兄ちゃんが「ダイエットって？ たとえば？」と首を傾げた。

「お、お酒を止めて……あとは……運動……」

「奈津、運動苦手じゃない？」

「うっ……」

「あれ、奈津ちゃん運動苦手なの？」

お兄ちゃんの言葉と、まるで追い討ちをかけるような遙介さんの言葉に胸が痛くなる。わたしは運動神経が良くなかったのもあって、昔から運動には苦手意識があった。

「なら俺が見てあげようか？」

どうしよう……と項垂れながら考えていると、遙介さんがそう言った。その言葉に「えっ」と驚いて遙介さんの方を振り返ると、にっこりと笑顔を浮かべる遙介さんが見える。

「水泳でいいなら、インストラクターの資格持ってるよ」

それはとてもありがたい言葉だった。遙介さんの言葉に顔を輝かせたわたしは、「どうする？」という遙介さんの言葉に二つ返事で頷いた。

どこことなく心配そうなお兄ちゃんに気がつかず、わたしは遙介さんとスケジュールを合わせてその日はお別れした。スケジュールを決めている間中、遙介さんの手がわたしの膝をすりすりと撫でていたことも気にせずに。



「やっぱり奈津ちゃんスタイルいいね！」

笑顔の遙介さんに、水着に着替えたわたしはなんだか少し恥ずかしくなってしまう。

あれから数日後、わたしは遙介さんが働いているスイミングスクールに来ていた。

フィットネス用の水着を持っていないため新しく買うことを遙介さんに伝えると、スクールでも買えるよと教えてもらって買ったのだけれど、着てみてから自分で調べて買えばよかったと少し後悔した。スクールで売っていたのは所謂スクール水着のような形のもので、体のラインは出てしまうしお股も胸元もなんとなく心許なくて、そわそわしてしまう。自分でちゃんと調べて買えば、もっと露出の少ないものもあったはずなのに……。

少し後悔しながらも、遙介さんに促されて準備運動を始めた。まずは柔軟体操からということで、プールサイドでマットの上に座り、足を開いて前屈をす

る。遙介さんがわたしの前に座り、足が閉じないようにと足で足を開きながら、手を引いて前屈の補助をしてくれた。

「でも今日、洗が来れなくて残念だったね。絶対行くって言ったのになあ」

「はい……。急にどうしても外せない仕事が入っちゃったらしくて」

遙介さんの手に促されて上半身を前に倒しながら、電話口のお兄ちゃんの申し訳なさそうな声を思い出す。日を改めることも提案してくれたけど、遙介さんの予定もあるのでさすがにそれは断った。

「じゃあ次は寝転がってくれる？」

「は、はい」

その言葉に頷いて、遙介さんの指示通りにマットの上で仰向けに寝転がる。片膝を折りたたむように言われて膝を曲げると、その上に遙介さんが覆い被さるように体重をかけた。寝転がったわたしの上から遙介さんが覆い被さって、少し恥ずかしい。そう思っていたら、遙介さんがにこりと微笑んだ。

「ゆっくり息してね」

「はい……」

ドキドキしていたのがバレないように、少し目を逸らす。そのまま遙介さんの体重がかかって股関節が伸ばされたけれど、ふと、足の付け根に違和感を感じた。

（遙介さんの膝、当たってる……）

体勢的にしょうがないのかもしれないけれど、遙介さんの膝がわたしの足の付け根に当たってしまった。しかも、体重をかけるためなのか、ぐりぐりと刺激するように押し付けられている。

「……っ……」

（これはストレッチなんだから気にしちゃだめだ……）

意識しないように視線を遠くに投げてみても、そのたびに刺激されるので難しかった。スクール水着のような形状のこの水着は、足部分は秘部だけを隠すように心許ないから、そこを晒け出すようなこの体勢はよく考えるととても恥ずかしいかもしれない。

「奈津ちゃん、反対側も」

「は、はい」



通介さんに言われて、今度は反対側の股関節を伸ばす。そこでようやくこの刺激も終わりかと思っただけ、反対側の足に入れ替えても再び膝が股に当たってしまっていた。

（うう、体勢が恥ずかしいことにも気づいちゃったから、なんか余計に気になっちゃう……）

ぐいぐいと当てられる膝から意識を逸らそうと目を瞑ってみたけれど、余計に足の付け根の中心が熱く感じてしまうだけだった。

「奈津ちゃん、へいき？ 痛くない？」

「……っあ……、へいき、です……」

「そう？ じゃあもう少しだけ続けようね」

（まだ続くの!?!）

それからまた少しの間刺激され続けてようやく解放されたころには、足の付け根の中心がすっかりじんじんと熱を持っているのを感じてしまった。

（やっと終わった……ただストレッチしてるだけなんだから、意識しないようにしなきゃ……）

「じゃあ次は、腕を上には伸ばせる？」

「こう……ですか？」

「そうそう」

そわそわと落ち着かなくなってしまった下半身を気にしないようにしながら、遙介さんに言われて今度は寝転がったまま両腕を上には伸ばす。遙介さんはわたしの頭側に移動して、わたしの脇の下あたりに手を添えた。

「ここらへんを伸ばすのを意識してね」

「はい」

頷いて、腕を思い切り上に伸ばした。遙介さんの手が押さえるようにわたしの脇の下に置かれていて、そのおかげで思い切り伸ばすことができる。

「……ん……」

これ気持ちいいかとも思いつながら腕を伸ばしていると、不意に両胸の先端に遙介さんの手が当たって小さな声が漏れてしまった。へんな声を出してしまったと慌てて遙介さんの方を見たけれど、下からだどんな表情をしているのかはわからなかった。

「んっ……♡」

それに安心したのも束の間、再び遙介さんの手が胸の先端に当たる。今度は一瞬当たった先ほどとは違い、すりすり♡ と撫でるように触られたことで、もう少し大きな声が漏れてしまった。

（どうしよう、遙介さんの手、乳首に当たっちゃってる……♡ 乳首だって気づいてないのかな……？♡）

たまたま当たってしまったているだけなんだと思うけれど、今もまだ手がすりすり♡ と乳首を撫でるように動いているので、だんだん体が気持ちよさを拾い始めてしまっていた。

「っ……♡」

（どうしよう、乳首勃ってきちゃった……♡ えっちなこと考えてるって遙介さんにバレちゃう……♡）

先ほど足の付け根に刺激を与えられていたこともあってか、すぐに乳首が固くなってしまっているのがわかる。だんだん固くなってきた乳首に遙介さんが

気づいても良さそうなのに、手はすりすり♡ とそこを撫でるように動かすことをやめてくれなくて、恥ずかしさに顔が熱くなりながらも口を開く。

「あ…っ、あの、ん♡ 遙介、さん……♡」

「ん？」

「も、もう、へいき……っ♡ だから、終わり…に……♡」

「んー、そうだね。じゃああと十秒で終わりにしようっか」

「は、い……♡」

遙介さんはそう言うのと、「いーち」とゆっくり数を数え始めた。その間にも乳首に当たっている手は動いていて、すりすり♡ と撫でるような動きから、くにくに♡ と摘まむような動きに変わる。

（あ、そのため♡ くにくにされるともっと気持ちくなっちゃう……♡）

「……んっ……ふ……♡」

へんな声を出さないようにと意識していると、今度は鼻の奥にかかったような息が漏れていった。なんとか気づかれないように、声を押し殺しながら絶え間なく訪れる快感に耐える。

「ごーお」

「あ……っ♡」

その声にあともうちょっと、と思っていたら、今度はカリカリ♡と爪で甘く引っかくような動きに変わった。

急に訪れた刺激に、つい声が漏れてしまう。恥ずかしくてかあっ顔が熱くなったけれど、遙介さんは気づいていなかったようであん心した。

くにくに♡ かりかり♡

押し潰すように摘まれたり、弾くように引っかかれたり、遙介さんの手がわたしの乳首の上で動いている間、ずっと口を引き結んで声を我慢する。気にする余裕がなくて自分では気づかなかったけれど、声を我慢している分、身を振るように腰が動いてしまっていた。

「じゅーう」

「あっ♡」

最後にそう言うと同時に乳首の先をきゅっ♡と摘まれて、一番大きな声が漏れてしまう。けれど遙介さんは立ち上がってプールへと入ったので、声は聞

こえていなかったらしい。安心したような、むずむずするような、複雑な気持ちを抱きながらわたしも体を起こした。

「準備運動はこれくらいにして、プール入ろっか。奈津ちゃんもおいで」

「は、はい……」

少し息が乱れてしまいながらもプールに向かうと、先にプールに入った遙介さんが手を差し出してくれる。プールサイドに座りながらありがたくその手を取ってプールへと入ると、ぬるい水が体を包んだ。

「寒くない？ 大丈夫？」

「大丈夫……です」

遙介さんの言葉に頷く。先ほどのことで体が熱を持ってしまったから、ぬるいはずの水は少しひんやりして気持ちいいくらいだった。

「じゃあまずはバタ足からにしようか。プールサイドに手について、やってみて」

「はい……」

言われた通りにプールサイドに手をつけて顔を上げたままバタ足をするけれど、なんだか下半身に力が入らなかった。隣で見ていた遙介さんが首を捻る。

「うーん、体ちょっと沈んじゃうね」

「ご、ごめんなさい……」

さっきの刺激で下半身がうずうずしてしまっているからだなんて言えない。顔が熱くなったのを誤魔化すように俯くと、遙介さんが「もう一回やってみてもらえる？」と言ったので、もう一度プールサイドに手をつけてバタ足をした。

「体に力が入っちゃってるのかもしれないから……ここ、マッサージしようね」

「ひっ♡」

バタ足をするわたしの足の間に手を差し込んで、遙介さんが足の付け根の中心に触れる。割れ目をなぞるように、すり♡すり♡と撫でられると、甘い声が出てバタ足を止めてしまった。

「あっ♡　そこ、あの……んっ♡」

「バタ足止まってるよ。もうちょつとがんばろうね」

「ん…っ♡ は、い……♡」

遙介さんに促されて、よくわからないままバタ足を再開する。再開すると、まるでいい子いい子するようにもう一度おまんこをすりすり♡ されて、気持ちよさに頭がくらくらしてしまった。

「やっぱり奈津ちゃん体沈んじやうね。こっちの方が力抜けそうかな？」

「あっ♡」

割れ目を往復していた手が、わたしの一番弱いところ——クリトリスに宛てがわれて、ビクッ♡ と体が震えてしまう。

「ん、こっちの方が反応が……体の力が抜けてるね。このままバタ足続けようね」

「うっ、あ……♡ は、はあい……っ♡」

水着の上からクリトリスをカリカリ♡ と爪で引っかくように触られて、びりびりと頭に甘い痺れが走る。だんだんうまく体を動かせなくなっていくわたしを見かねてか、遙介さんがもう片方の腕で上半身を支えてくれた。けれど、



その手が固く勃ち上がった乳首をピンッ♡と弾くように触るから、両方の刺激にバタ足どころではなくなってしまう。

「んっ♡だ、だめ♡も、できな……あっ……♡」

「だーめ、奈津ちゃん、気持ちいかもしれないけどもうちょっと続けないと」  
「あっ、あ♡んう……♡」

遥介さんに言われるがまま、体に力が入らない状態でなんとか足を動かし続ける。そのたびにクリトリスに触れる遥介さんの指が擦れるから、快感以外なにもわからなくなっていた。

カリカリカリ♡

すりすり♡くにくに♡

水着の上から固くなった乳首とクリトリスを弄ぶように触られて、もう足の間は水以外の液体でぬるぬるになってしまっているのがわかるほどだった。

（どうしよう、もうあとちょっとでイっちゃいそう……♡ 遥介さんはそんなつもりじゃないのに……♡）

そう思いながらも快感に集中し始めたそのとき、遙介さんから「ちょっと休憩しようか」と声がかかった。

「えっ……あ……♡」

遙介さんの手がわたしの体から離れたことで、バタ足なのかなんなのか、もはやわからなくなってしまうている足を止める。けれど、わたしの体は力が入らなくて、そのまま遙介さんにもたれかかってしまった。

「あ、ごめ……なさ……♡」

肩で呼吸を繰り返しながらそう言うと、遙介さんがわたしの腰に手を回す。

「いいよ、奈津ちゃんがんばったね」

遙介さんはそのままグイッとわたしの体を軽く持ち上げると、プールサイドに腰掛けさせた。遙介さんも続いてプールサイドに上がったところ、タイミングよくスマホの着信音が鳴る。遙介さんのスマホのようだ。

「ちょっと待っててね」

遙介さんがプールサイド端のベンチに置いてあるスマホを取りに行く後ろ姿を、呼吸を整えながら見送るけれど、足はもぞもぞと動いてしまっていた。

（あとちょっとでイけそうだったのに……♡　むずむずしちゃうよお……♡）

そう思いながら足の間を擦り合わせてしまっていると、すぐに遙介さんが戻って来た。スマホを耳元に当てながらなにやら話していたので電話だと思っていると、遙介さんは座り込むわたしの後ろからわたしを抱え込むようにして座る。遙介さんの足の間にわたしが座っていて、まるで抱きしめられているみたいなの体勢になったかドキドキしてしまった。

「んー、だから大丈夫だって。今は休憩中」

遙介さんが電話に向かってそう言うのと、電話口の向こう側から少しだけ声が聞こえて来た。お兄ちゃんの声だ。

（心配して電話してきたのかな……仕事忙しそうだったのに……）

そんなことをぼんやり考えていると、わたしの肩に回っていた遙介さんの手が少しずつ下へと降りていく。その手の行方を、未だぼんやりした頭で見守っている、その手はわたしの足の付け根——クリトリスまで降りて来た。

「んうっ……!?!♡」

押し潰すようにクリトリスに触れた遙介さんの手に驚いて、振り返って遙介さんの顔を見る。遙介さんは変わらずお兄ちゃんと電話をしながらも、わたしの視線に気がついて人差し指を口の前に立てた。シーっとてもいうようなそのポーズといたずらっぽい笑顔に、再び体が熱を持ち始める。けれどお兄ちゃんと電話しているのに変なことを言うわけにはいかないしと思って口を引き結ぶと、遙介さんの指がまたわたしのおまんこに向かった。水着を横にずらしておまんこに直接指が触れると、ぬちゅ……♡ とあきらかにプールの水ではない水音が聞こえて恥ずかしくなる。

「もー、洗は心配性だなあ。大丈夫だって」

遙介さんはいつも通りの声音で電話しながら、わたしのおまんこに指を差し入れた。ビクッ♡ と体が震えてしまいながら、声が漏れてしまわないように口を手で押さえる。

ぬちゅ……♡ と音を立てながら指が差し込まれると、とろとろの内壁を擦りながらゆつくりと奥へ進んでいった。そのたびに体がビクッ♡ ビクッ♡ と震えて快感に身を振るけれど、なんとか声を抑える。

「……あっ♡」

けれど、声を抑えていたのも束の間、遙介さんの指が第二関節くらいまで入ったところまでたどり着いたざらざらの部分を擦られると、我慢できなくて声が漏れてしまった。急に訪れた激しい快感に声が漏れてしまったことに驚いて、より体が熱くなりながらも慌てて口を強く押さえ込む。電話口からお兄ちゃんの不思議そうな声が聞こえた。

「ん？ なんでもないよ、奈津ちゃんは今離れたところで休んでるし」

遙介さんがなんでもないように言いながらも、気持ちいいそこを一定のリズムでトントン♡ とノックし続ける。

「っ……ふ……んっ……♡　　♡♡♡」

（声漏らさないようにしてるけど、そこ擦られると気持ち良すぎて声出ちゃいそう……♡ 我慢しないとお兄ちゃんに聞こえちゃうのに♡）

先ほどからずっと気持ちいいところを刺激され続けてきたこともあってか、そこをすりすり♡ なでなで♡ と擦られるだけでなんとか抑えられていた絶頂感がすぐに昇り詰めてしまう。擦られるたびに体がビクビク♡ と震え

て、声を抑える代わりに鼻から、ふーっ♡ ふーっ♡ と荒い息が漏れていった。

(もうだめ♡ 気持ちいいところばかりずっとすりすり♡ されて、我慢できない♡ 声出してイっちゃう♡♡)

電話で話し続けながらも手を止めない遙介さんの腕に、縋り付くように掴んで首を横に振った。もうだめだという意味表示だ。けれど遙介さんはそのわたしを見つめながら嬉しそうに微笑み返しただけで、手を止めてはくれなかった。それどころか手の動きはどんどん速くなっていて、すりすりすり♡ とさらさらしたそこを的確に擦り続ける。

「っ……あ♡ ぶ、く……っ♡ っ……っ♡♡♡」

(あ♡ まだお兄ちゃんと遙介さんが電話してるのに♡ 声ちゃんと我慢できないでイっちゃった……♡♡♡)

ビクビクビクッ♡ と腰が大きく跳ねて絶頂に達してしまう。肩を大きく上下させながら呼吸を繰り返し、快感の余韻に浸るようにビクッ♡ ビクッ♡ と腰が僅かに揺れた。

「ん、ちょっとごめん、洗。またあとでかけるから」

そのころようやく遙介さんが電話を切ると、スマホをその場に置いた。その仕草をぼんやりとした頭で遙介さんに体を預けながら見ていると、再びナカのざらざらしたところを擦られ始める。

「んっ♡ 待つ、ようすけ、さ……っあ♡ 今、いったばっか、り……だからあっ♡ ……っ♡♡」

「奈津ちゃんかわい…♡ 声、我慢させちゃっててごめんね♡ 今度はちゃんと聞きたいから、もう一回イキ声聞かせて?♡」

遙介さんがそう言いながら、おまんこの中をすりすり♡ と擦る手とは反対側の手をクリトリスに宛てがった。ぷっくりと大きく勃起上がったそこを、しこしこ♡ とまるでおちんぼにするみたいに指で挟んで動かす。

「あっ……ん♡ だ、だめっ♡ それ、気持ちよすぎちゃ……あ、あっ♡ ……♡♡」

「大丈夫♡ 奈津ちゃんがいっぱい気持ちよくなってる姿、俺に見せて♡ ここ中と外からいっぱいなでなでしょうね♡」

おまんこの中を遙介さんの指が撫でるたびに、ぬちゅ♡ぬちゅ♡と水音が  
がしていて、自分の体がどれだけ気持ちよくなってしまっているのか教えられ  
ているようで恥ずかしい。そこから溢れ出た愛液を塗り込まれたクリトリスが  
しこしこ♡と擦るように撫でられて、どんどん下半身が熱を持っていく。

「あ、あっ♡だめ、だめ♡出ちゃ……んっ♡あっ♡それだめ、と  
め……っ♡う……っ……♡」

「ん？ 出ちゃいそう？♡かわいいね♡いいよ、奈津ちゃんのえっちなお  
しっこいっぱい出そうね♡」

「やつ、あ♡あ、だめっ……はやくしたら出ちゃう……♡ん……あっ♡  
……♡」

とろとろのGスポットをこちゅこちゅ♡と擦る指の動きと、クリトリスを  
しこしこ♡する動きがどんどんと速くなっていて、奥からおしっこが漏れ  
そうな感覚が迫り上がってくる。それといっしょに気持ちいい感覚もどんど  
ん昇っていった、絶頂感がどんどん近づいてきた。



「んっ、あ♡ あ……も、だめ…っ♡ 出っ……あ、いつちゃ……♡  
んう……っ……っ……！♡♡」

ビクッ♡ ビクビクッ♡

ぷしっ♡ ちょろろろ……♡

Gスポットとクリトリスを同時に、こちゅこちゅ♡ と擦られ続けて、いったのと同時に潮を吹いてしまった。溢れ出た潮がお尻を伝って、プールサイドに小さなシミを作る。

「っひ……あ、あ……♡」

初めての感覚に、気持ちよさの余韻と羞恥が同時に襲ってきて、目尻に涙が浮かんだ。震えて力の抜けた体をそのまま遙介さんに預けていると、遙介さんが後ろからぎゅうっとなだしの体を抱きしめる。

「あ、ようすけ、さ……ごめ……」

震える唇で反射的に謝りかけたけれど、遙介さんの唇がちゅうつ♡ とうなじに吸い付いたことで止まってしまう。

「奈津ちゃんかわいすぎ……♡ 気持ちいいしっこできてえらいねえ♡」

そのままの体勢でちゅっ♡　ちゅっ♡　とうなじに何度もキスを落とす遙介さんに、浮かんでいた涙が乾いていく。くすぐったくて少し恥ずかしい、けれど、そんなことより。

（わたし、汚しちゃったのに……遙介さん、怒ってない……？）

少し首を捻って遙介さんを振り返ると、今度はほっぺたにキスが降ってくる。それに驚いたけれど「あ、あの」と無理やり口を開くと、遙介さんがキスの嵐を止めてくれた。

「ん？　どうしたの？」

「あ、あの……わたし、汚しちゃって……あの……」

言いながら、恥ずかしくて顔に熱が集まっていく。真っ赤であろう顔を見られたくなくて俯くと、もう一度ほっぺたにちゅう♡　と遙介さんの唇が吸い付いた。

「気にしないでいいのいいの♡　奈津ちゃんが気持ちよくなってる姿をいっぱい見られるのが嬉しいの、俺は♡」

遙介さんはそう言うのと、わたしの肩にかかっている水着に手をかける。

「だから、もっと気持ちよくしてあげる♡」

その言葉にぞくつと肌が粟立つと同時に、期待するようにじゅわあ…♡とおまんこから愛液が漏れた感覚がした。欲しがるみたいに、いつのまにか溜まってしまった唾液をぐくり、と飲み込むと、遙介さんの手が水着を少しずつずらしていく。

（どうしよう…こんなところで水着、脱がされちゃう…♡）

頭ではそう思うのにその手を拒否できないまま、肩にかかっていた水着が少しずつ、少しずつ、腕までずらされていく。

けれどそのとき沈黙を遮るように、ブブブブッ！ と音が鳴った。

「……っえ」

驚いて思わず声が漏れると、そばに置いてあった遙介さんのスマホだった。

遙介さんは面倒くさそうにそちらを見て、それからはつとしたように目を見開く。

「っあゝ、そっか。最初だからちょっと短く設定してたんだ」

遙介さんは思い出したように呟くと、「ごめん、奈津ちゃん。今日はこまでにしょつか」とわたしの方を向いて言った。それに呆然としながら頷いて、いそいそと乱れた水着を直す。

（そ、そっか。今日はこれでおしまい……。ちょっと残念なような……。って、なに考えてるんだろう、わたし……）

恥ずかしさから顔を上げられないでいると、遙介さんがそんなわたしの後ろから耳元でそっと囁いた。

「また次回ね♡」

見透かされていたようなその言葉を囁かれた途端、かあつと体が熱くなる。下半身は期待するようにじんじんと熱を持ったまま、その日はそれでおしまいになった。